暮らしの底上げ

クラシノソコアゲ応援団！

第32回 カラスとブラック

連合会長 神津里季生

我が家の犬猫たちの一員、白猫の通称ナーラが過酷な虐待を受けた直後に我が家に来てからもう九年になる。

何者かに後ろ足の三分の一を切り取られ、目と耳を接着剤でふさがれるという仕打ちを受けて多摩川の河原に捨てられていたのである。人だかりのなかからうちのカミさんが拾い上げ、知人の久保田先生（多摩川動植物の権威）と二人で動物病院に連れていき、蚤（のみ）の駆除とともに応急処置を受けさせた。その後も不自由な足と聴覚障害は残ったままだが、犬猫の先輩たちにも温かく迎えられ、幸せな生活を送っている（漱石先生の猫とは異なり、ナムタン・ヘレン・ナーラックという立派な名前も授かっている）。

多摩川沿いでは捨てられた子猫などは普通の状態でもカラスの餌食となってしまうケースが当たり前だが、ナーラがこんな状態でもさらわれなかったのにはワケがある。隠れた権威であるうちのカミさんによれば、この子の独特な鳴き声、普通の猫のミャーミャーではなくギャーギャーという声が、カラスの子供の鳴き声にそっくりなのだそうである。

そういう生い立ちであるからナーラはカミさんベッタリでカミさんもナーラには大甘だ。夜寝床に入っているカミさんの頭を踏みつけて横断するという癖があるのだがそれも一種の愛情表現であると耐えている。

あるときなどは眠りに入った状態でポカンと開けていた口の中に足がすっぽり入ってしまい悲鳴をあげていた。思わずアハハハと笑ったら、あなたには熟睡しているときに頭のハゲのところにナーラが頭をなすりつけているわよと教えられた。なんてこった。

さてカラスならぬブラック企業やブラック上司はいたいけな若者や立場の弱い従業員に対して相変わらずの虐待的仕打ちを続けている。いくら色が黒いからといってあいつらと一緒にするなカアカアとカラスから文句が出そうだが、これだけ社会問題化しているなかでもブラック職場はなくならない。連合総研のアンケート調査では、働く二十代の四人に一人が自分のところはブラックだと思っている。

中途半端に声をあげてもかえって藪蛇（やぶへび）になるという恐れを持つのも無理からぬところはあるが、しかし押し黙って虐待を受けているだけでは彼らは増長し続ける。

わが国の労働組合組織率は至近の数字で一七・四％、つまり八割以上の人は労働組合という傘に守られていない。連合はこのようないわゆる未組織労働者の方々からの労働相談を広く受け付けており、パワハラ・セクハラ・マタハラ等のハラスメント、長時間労働・サービス残業、突然の解雇・賃金未払い等々、そして最近は休ませてくれない、辞めさせてくれないなどというブラックバイトの問題等々、年間を通じて約一万六千件の相談を受け付けている。

どうか一人で悩まず、一人だけで抱え込まずご一報ください。息子さん娘さんお孫さんの問題でもOK。もちろん秘密厳守です。☎0120-154-052、フリーダイヤルイコーヨレンゴウニ。

こうづ・りきお　1956年、東京都生まれ。東京大学在学中は野球部マネジャー。卒業後、新日本製鐵株式会社入社。新日鐵労連会長、基幹労連中央執行委員長などを経て、2015年、日本労働組合総連合会会長に就任